

コロサイ人への手紙4章2節 「たゆみなく祈る」

1A たゆみなく祈る人々

1B モーセを支えるアロンとフル

2B サムエルの執り成し

3B ゲッセマネにおける主の祈り

2A あきらめない祈り

1B 不正の裁判官に訴えるやもめ

2B ダニエルの三週間の断食

3B あきらめた王ヨアシュ

3A 主のみこころと一つになる祈り

1B 許容するみこころ

2B ハンナのうめき

3B ラザロのよみがえり

4A 目を覚ました、感謝の祈り

1B 眠っていたペテロ

2B 戻って来たサマリア人

本文

コロサイ人への手紙 4 章を開いてください、私たちの聖書通読の学び、ついに今日でコロサイ書をすべて読み終えます。4 章全体を一節ずつ、午後礼拝で見えていきます。今朝は、2 節に注目します。「**たゆみなく祈りなさい。感謝をもって祈りつつ、目を覚ましていなさい。**」パウロが、3 章にて、新しい人として生きるためのいろいろな勧めを行いました。そして最後の勧めが、祈ることです。

1A たゆみなく祈る人々

パウロは、今、ローマの牢にいて、コロサイの人々とは遠く離れており、彼らとは一度も会ったことがありませんでした。けれども、彼はとても親しみを抱いていました。それは彼らのために祈っていたからです。「1:3 私たちは、あなたがたのことを祈るときにいつも、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。」また、「1:9 こういうわけで、私たちもそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたが、あらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころについての知識に満たされますように。」パウロは、このように祈りの中で、コロサイの人々が自分の心の中にありました。

そして今、今度は彼らが祈ってくれるようお願いしています。彼らが祈ることによって、主にあってつながることができます。キリストのからだは、自分たちの中に建て上げられることを知ります。

私たちの教会が互いのために祈っているのは、このためです。祈り会では、定期的に来ていてすべての人のために祈っています。また、しばらく来ていない人たちのためにも来ています。私たちは、一方的に誰かが祈っているだけでなく、互いに祈っていくべきですね。

そして、パウロがここで言っているのは、単に祈るのではなく、「**たゆみなく祈りなさい**」と仰っていることです。弛みないという日本語の言葉、訳はともいいですね。しっかりと、献身的にというような意味合いです。熱心に、といってもよいでしょう。軽く祈っておく、というのではなく、熱心に、継続的に、あきらめないで祈るということですね。テサロニケ第一 5 章でも、「**絶えず祈りなさい**。」と教えています(17 節)。

1B モーセを支えるアロンとフル

祈りの姿勢を取っていませんが、モーセが、イスラエル人がアマレク人と戦うために手を上げていた時にアロンとフルがしたことは、たゆみない祈りと同じ心だったと思います。エジプトを出て、荒野の旅をしている時に、アマレク人が襲ってきました。それで、ヨシュアが男たちを率いてアマレク人と戦いましたが、モーセは丘の頂に立って、神の杖を手にして、手を高く上げます。モーセが手を高く上げている時は、イスラエルが優勢になり、手を下ろすとアマレクが優勢になりました。手を下ろしてしまうのは、手が重くなったからです。それで、アロンとフルは、石を持ってきて、モーセをそこに座らせました。それから、一人はこちらから、もう一人はあちらから、モーセの手を支えました。それで、彼の両手が日の沈むまで、しっかりと上げられていました。これが、たゆみなく祈るという姿勢ですね。

2B サムエルの執り成し

預言者サムエルは、たゆみなく祈らなければ罪であることを語りました。「I サム 12:22-23 【主】は、ご自分の大いなる御名のために、ご自分の民を捨て去りはしない。【主】は、あなたがたをご自分の民とすることを良しとされたからだ。私もまた、あなたがたのために祈るのをやめ、【主】の前に罪ある者となることなど、とてもできない。私はあなたがたに、良い正しい道を教えよう。」主が愛されて、見捨てられていないのに、どうして自分が祈るのをやめることができようか？ということですね。ペリシテ人が戦って来て、彼らが苦しむことは日常でした。だから祈るのをやめませんでした。私たちが、主がそれぞれを愛しておられるのですから、互いのために祈らざるを得ませんね。

3B ゲッセマネにおける主の祈り

そして主ご自身が、たゆみなく祈られました。ゲッセマネにおいて、深く悩み、もだえながら祈られました。できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られました。一度ならず、二度、祈られました。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、また他の弟子たちは眠ってしまいましたが、主はまた戻られて、もう一度祈られました。三度、同じことを祈られたのです。「14:36-3a7 アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むこ

とではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」三回、祈られているなかで、この杯を飲むことが父の願われていることなのだと確認されたのです。そうやって、ご自身の心の中で、父の願いをしっかりと収めていられました。

2A あきらめない祈り

1B 不正の裁判官に訴えるやもめ

イエス様は、たゆみなく祈ることを教えられました。主は必ず、その訴えを聞いて下さりますが、私たちが、祈ることをあきらめて、その祈りの答えを待たずして、その信仰を捨ててしまうことを、不正の裁判官の喩えで語っておられました。不正の裁判官のところに、一人のやもめが訴えに来ました。この裁判官はしばらく取り合わなかったけれども、「ルカ 18:5 うるさくて仕方がないから、彼女のために裁判をしてやることにしよう。そうでないと、ひっきりなしにやって来て、私は疲れ果ててしまう。」と言っています。そして、イエス様が言われます。「18:7-8 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」速やかに、裁きを行ってくださるのです。ところが、その時までには、あきらめていて地上では、その訴えについての神への信仰を見るのが、ごくわずかであると言われています。

2B ダニエルの三週間の断食

ある祈りはすぐに聞かれますが、多くは、忍耐して祈っていて、それでようやくかなえられているのを見ます。

ダニエルが、まる三週間、断食をしながら祈っていたら、主ご自身ではないかと思われる輝きで御使いがやってきました。彼は、これから起こる大いなる戦について、ダニエルに伝えるために遣わされていました。ところが、こう言っています。「10:12-13 恐れるな、ダニエル。あなたが心を定めて、悟りを得ようとし、自分の神の前で自らを戒めようとしたその最初の日から、あなたのことは聞かれている。私が来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシアの国の君が二十一日間、私に対峙して立っていたが、そこに最高位の君の一人ミカエルが私を助けに来てくれた。私がペルシアの王たちのところに残されていたからだ。」祈り始めてすぐに、その願いは聞かれていましたが、ペルシアの国の君が立ちはだかっていたのです。それで三週間、かかりました。

もしダニエルが、20 日で、三週間に一日満たなかったら、どうなっていたことでしょうか？もうあきらめて、信じるのをやめていたら、どうなっていたでしょうか？その大いなる戦の幻の啓示が、与えられなかったことになります。神はすでにその啓示を用意しておられるのに、受け取る側があきらめているので、神は自由意志を侵されませんから、啓示しようがなくなるのです。

3B あきらめた王ヨアシュ

あきらめたことによって、主の用意されていた完全な勝利を得ることのできなかった、イスラエルの王がいます。ヨアシュです。預言者エリシャが老いて、もう死にそうになっていました。ヨアシュがとても悲しんでいると、矢を窓から放ちなさいとエリシャはヨアシュに言いました。それを、「主の勝利の矢、アラムに対する勝利の矢。」と宣言して、アラムを討ち、絶ち滅ぼすと預言しました。

そして今度は、矢を地面に打ちなさいと言いつけました。ヨアシュは、三回打ちましたが、それでやめてしまいました。エリシャが激怒しました。「あなたは五回も六回も打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを討って、絶ち滅ぼすことになっただろう。しかし、今は三回だけアラムを討つことになる。」と言ったのです(Ⅱ列王 13:19)。せっかく、完全な勝利を主が用意されていたのに、あきらめてしまって、そのすべてを得ることが出来なかったということが起こります。

3A 主のみこころと一つになる祈り

ですから、たゆみなく祈る必要があるのです。

1B 許容するみこころ

ただ、たゆみなく祈るのは、神の思いを変えることではありません。神が御心としておられることに対して、私たちがそうではないと訴えて、それでみこころを変えることでは、決してありません。神のみこころは完全であり、それを変えることは、完全なものより引き下げることでありますから、そんな愚かなことをする必要はありません。

主のみこころを変えようとするのは、むしろ祈っていないからこそ行うことです。サムエルに対して、イスラエルの民が王を願ったことを思い出します。他の周りの国々がそうであるように、王を与えてくださいと要望しました。サムエルは、それはまことの王である神を否んでいることであり、また預言者である自分を否定していることと受け止めました。しかし、主はサムエルに、彼らの声を聞き入れよ、と言われました。このことは、主のみこころを損なっているのですが、彼らが、自分たちが何をしているのかを分からせるために、あえて許容されたのです。(Ⅰサムエル 8章参照)

私たちは、このようなイスラエルの民の要望のように、主のみこころを変えようなどということを試みてはいけません。主は最善を私たちに願われているのに、そうではないものが私たちの身にふりかかることとなります。

2B ハンナのうめき

では、なぜたゆみなく祈るのか？それは、私たちの心が、主の願われていることと一つになるためです。先ほど、イエス様がゲッセマネの園で三度祈られたことを話しましたが、父の願われていることとイエス様の心が一つになり、それで揺るがぬ心で十字架の苦しみを受けられました。主の

みこころと自分の心が一つになる時に、主がご自分のみわざを私たちの内で、また私たちを通して行ってくださるのです。

サムエルの母ハンナのことを思い出してください。彼女の胎を閉じたのは、主ご自身であることが書かれています。それで、ハンナは悩み苦しみました。夫エルカナのもう一人の妻ペニンナは、そのことでハンナを虐めました。ハンナは、心が痛んで、主の幕屋で祈っていました。激しく泣きました。そして、ついにこのように祈っていたのです。「Iサム 1:11 万軍の【主】よ。もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、私を心に留め、このはしためを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、【主】にお渡しします。そしてその子の頭にかみそりを当てません。」このことを祈って、生まれたのがサムエルです。彼女は主に誓ったように、その子を主の前に献げました。サムエルは、幼いころから主の天幕に仕えました。

ハンナの時、まだ士師の時代でした。いかに靈的に混乱していたかは、士師記を見ればよく分かりますね。そこには、靈的復興が必要でした。その靈的復興を導く指導者が必要でした。そのためには、主にすべてを献げる人が必要でした。そこで、主は敢えてハンナの胎を閉じたと考えられます。そして、ハンナが主に男の子を献げることが祈るよう導かれました。主のみこころが、たゆまぬ祈りの中で、私たちの心に置かれるのです。

3B ラザロのよみがえり

そして、主の願われていることは、私たちが願いをはるかに超えて、その願いをかなえる時があります。「エペソ 3:20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に」とあるとおりです。それで、私たちの願いがかなえられないように感じる場合があります。ラザロのことを思い出してください。彼は、マルタとマリアの兄弟です。ラザロが病気なので、癒してくださるよう願いました。ところが、イエス様は二日、ベタニアにいる彼らの家に行くことをしませんでした。二日とどまって旅をしたので、もう死んでしまいました。死んでから四日経っていました。しかし、イエス様は、わたしを信じなさいということをお教えくれます。それは、ご自身がいのちであり、よみがえりなのだということを知るようにさせるためです。病気を治すのではなく、死者をよみがえらせることによって、神の栄光を現すのです。

ですから、私たちも、祈りが聞かれていないと感じても、たゆまず祈るのです。その中で、私たちの心は主のものと一緒にいき、かつ、私たちの願いがその願い以上に、聞かれることを知っていきます。

4A 目を覚ました、感謝の祈り

そして、たゆまず祈る中で、「感謝をもって祈りつつ、目を覚ましていなさい。」と教えます。

1B 眠っていたペテロ

目を覚まさずに、眠っているということによって何が起こるでしょうか？ゲッセマネの園で、弟子たちにイエス様が言われたことは、「誘惑に陥らないように」ということでした。彼らは、けれども眠ってしまいました。これは、怠慢だったということよりも、あまりにも混乱して、ものすごい圧がかかっている、それで落ち込んで眠気が来たのかもしれませんが。いずれにしても、それによって何が起こったのか？ペテロは、ご自分の主を三度も、知らないと言って否んでしまったのです。

霊的に目を覚まさないで、眠るというのは、どういうことを指しているのでしょうか？それは、自分がどうなっているのかが、見えなくなることです。主のみこころから外れていても、自分は大丈夫だと思いついてしまうことです。全然、大丈夫ではないのに、そうだと思ってしまうことです。そして、眠ってしまうことによって、いざという時に主のみこころを行わず、肉に反応してしまうのです。ペテロの場合は、イエスの仲間でしょ？と問われただけで、知らないと言断言してしまいました。目を覚ましていれば、みことばを思い起こします。そして、主の平安の中に留まろうとしますから、用意に流れに迎合しません。こうしたことは、たゆみなく祈っている中で、主から与えられることです。

2B 戻って来たサマリア人

そして興味深いことに、目を覚ますのは、「感謝をもって祈りつつ」とあります。私たちは、祈りによって願うことは、数多くしますが、祈りがかなえられた後で感謝の祈りをささげることは少ないですね。けれども、これは大事です。十人のらい病人が、イエス様のところにやってきました。そして、イエス様は全員を清められました。癒されたことが分かって、十人のうち一人だけが引き返ってきて、「ルカ 17:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。」とあります。彼はサマリア人でした。イエス様は、ご自分の民の中で、神をあがめるために戻って来た者がいなかったと言われています。

私たちが、感謝の祈りを献げる中で、主が祈りを確かに聞いてくださったことを知ることによって、目を覚ましていることができるのです。主がおられることを知り、自分が主のみわざの中にあることに気づくのです。目覚めるのです！